

P-029

成長と発達の記録ツール「Ikeda_s」の自治体における活用促進のための検討

村田 絵美¹、藤野 陽生²、谷池 雅子²、片山 泰一²¹大阪大学大学院 連合小児発達学研究科附属

子どものこころの分子統御機構研究センター

²大阪大学大学院 連合小児発達学研究科

【はじめに】

Ikeda_sは、WHOの国際生活機能分類をはじめ、標準化された様々な尺度と自治体の関係機関の意見を基に作成し、年齢や障害の有無を問わず市内で統一して利用できる“成長と発達の記録ツール”である。我々は、Ikeda_sを導入開始当初より継続して使用している公立の児童発達支援センターの職員と同施設利用児の養育者を対象にIkeda_sの利便性や自治体が主体的に活用することの養育者のIkeda_s利用状況への影響、Ikeda_sの今後の利用場面拡大のための要点を明らかにすることを目的として調査を行った。

【方法】

2023年8-12月に職員26名と現在同施設を利用している児（以下、利用児）83名、および卒園児の養育者を対象にWeb調査を行い、養育者のうち同意が得られた方を対象にインタビュー調査も実施した。リクルート方法は、職員、および利用児の養育者へは施設長を通じた研究協力の案内配布に加え、研修会の際にアナウンスを行った。卒園児の養育者のリクルートは、通所受給者証発行課の窓口案内を設置した。

【結果】

職員11名（回答率42.3%）、養育者30名から回答が得られ、養育者のうち5名からインタビュー調査の協力が得られた。職員全員が「Ikeda_sの良い点や使用して良かったこと」として「年齢を重ねても同じ内容について記入するので、子どもの成長の経過が分かる」と回答した。一方、「使用して良くなかったこと」は、「当該施設以外の学校園や市の機関で活用されないで、活用のモチベーションが上がらない」が最も多かった。養育者が「良いと思うこと」は、「さまざまな項目があるので、子どもの得意なことや苦手なことが分かる」が最も多く、「使用して良かったこと」でも半数が「子どもに合った支援を受けることにつながった」「子どものことを多面的にみることができた」と回答した。一方、「使用して良くなかったこと」は、「記入量が多い」が最も多かったが、インタビュー調査の結果、Ikeda_sの記入、および活用方法について十分な説明を受けられていなかったという回答が多かった。

【考察】

Ikeda_sは子どもの得意なことや苦手なこと、成長の経過を可視化でき、子どもを多面的にみること、子どもに適した発達支援を可能にすることが関係者に評価されていた。一方で、活用には利用法についての周知と関係部署間の連携が必要である。

P-030

大学生における予定子ども数と影響要因との関連について

林田 リカ

¹長崎県立大学

【目的】

近年、日本は少子化や高齢出産などが増えてきている。一般家庭を対象とした先行研究では、将来希望する子ども数（以下、予定子ども数とする）を増加させる要因として、年齢やきょうだい数、労働が有効なものであり、きょうだい数が多いことで予定子ども数への評価が増える述べている。また、両親ともに首尾一貫感覚尺度（SOC尺度）得点が高いものは子育てを楽しむことができるという結果もある。そこで本研究では、大学生を対象に予定子ども数に影響する要因、およびストレス対処能力の高さと子ども数との関連について明らかにすることを目的とした。

【研究方法】

A大学に在学中の1～2年生297名を対象に、対象者の基本的属性、家庭環境、将来に関する希望、SOC尺度などを含めたアンケート調査を行った。調査期間は2017年7月。調査方法は、研究の目的と倫理的配慮について説明した後、調査票を配布し、記入後にその場で回収した。倫理的配慮として回答は無記名自記式とし、調査への参加は自由意思であり回答や内容によって不利益を被らないこと、データは研究以外に使用せず、研究終了後には処分することなどを口頭および書面にて説明した。

【結果および考察】

回収数は279名、有効回答数は271名（回答率97.1%）であった。男性は119名（43.9%）、女性は152名（56.1%）であり、平均年齢は18.9歳と同じであった。きょうだい数は2.4人と性別で違いはなく、予定子ども数は男性より女性の方が平均 2.4 ± 0.61 人とやや多く、子育て不安の割合も女性91.3%、男性77.1%と女性の方が多かった。将来子どもをほしいと思う者は性別に違いはなく、核家族が多かった（ $p=0.003$ ）。SOC尺度において男性の方が女性より処理可能感の得点が高く（ $p=0.040$ ）、子どもをほしくないと思う者はSOC尺度における有意味感が高値であった（ $p=0.004$ ）。以上の結果より、大学生が望む予定子ども数には性別、家族形態、SOC尺度が関連していた。男性より女性の方が子どもへの親和性に富み、良いイメージが強いため予定子ども数を多く望むと考えられる。また、子どもを望まない女性は「自分の時間がもてなくなる」「子育てや教育に出費がかさむ」などと考えており、現在の自分自身の生活に十分に意味を感じているため、有意味感が高くなったと考えられる。